



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	芸術作品における認識的価値と美的価値との関連性について
Author(s)	栗, 桢; LI, Zhen
Citation	哲学, 54, 1-17
Issue Date	2020-09-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95661
Type	departmental bulletin paper
File Information	54_t1.pdf



芸術作品における認識的価値と美的価値との関連性について

栗^{リッ}
楨^{ティ}

序論

芸術作品の認識的価値と作品における美的評価とは関係があるのか。そして、仮に関係があるなら、作品の認識的価値と作品における美的価値とはどのような関係で結びついているのかという問題は、芸術作品の道德要素と美的評価の間の関係などの問題に答えるための前提になっているだけではない。一つ目の問題に対する肯定的な答えは、芸術作品に対する美的評価は認識的価値・道德的価値などの非美的価値とは関係ないと主張する美的自律主義者たちが誤っていることを意味する。

本稿は主に三つの部分から成る。まず、Robert Steckerらの主張を参考に、美的価値と認識価値を区別する。次に、Berys Gautらの哲学者の著作をもとにして、芸術作品の認識的価値と美的評価との間には関連性があるということを確認的な立場から論証する。最後に、美的自律主義のどこが誤っているのかを説明する。

第一章 芸術作品における美的価値の定義について

芸術作品における認識的価値と美的価値の関連性を議論する前に、両者を区別することが必要である。そして両者を区別するために、美的価値と認識的価値の定義を明らかにしなければならない。

まず、美的価値の定義から考えたい。美的価値に対して一般的な定義をするためには、美的経験を定義する必要がある。現代の分析美学者たちにもっとも受け入れられている美的経験の定義は、Jerald Levinson による美的鑑賞の二層説から発展してきたもので、美的経験の最小説と呼ばれている。

Levinson によると、「美的鑑賞 (appreciation) とは、あるものの形式、質、意味に、それ自体のために注目し、かつ、それらのあいだにある相互関係に、そしてさらに、そうした諸特徴すべてが低層で知覚される特徴のうちの特定の集合から現れ出る仕方に、注目することである」⁽¹⁾。

Levinson の美的鑑賞に対する定義はあまりにも厳しいため、哲学者たちは彼の美的鑑賞に対する定義の後半を消して、いくつかの要素を追加してから、美的経験の最小説を作り出した。

美的経験の最小説は、美的経験とは、「対象の形式、質、意味ある特徴などに、それらを識別するような態度で、そして、それら自体のために、もしくはまさにその経験に内在的な報酬 (pay off) のために、注意を向けることによって、もたらされる経験」⁽²⁾ と考える立場である。

この最小説はまったく問題がないわけではないが、最小説による定義は今までの美的経験に関する定義の中で一番欠点が少なく、一般に受け入れられている物の見方を大幅に変更せず、我々の常識における美的経験を幅広くカバーしている。

Stecker は美的経験の最小説をもとにして、「芸術作品の美的価値は、ある経験の結果——すなわち、その作品のさまざまな特徴に着目し、それ自体のために (for its own sake) 評価される経験の結果——与えられるものである」と主張した⁽³⁾。なお、彼によると、美的価値は、「作品を理解する者に価値ある経験を与える力をもっている」⁽⁴⁾。ここで Stecker のいう経験とは美的経験のことである。すなわち、美的価値は、美的経験をしたうえで、この経験を理解し評価してから得られるものである。この定義を芸術作品に用いると、芸術作品を美的に評価した結果、すなわち芸術作品の美的価値は、その作品が提供した美的経験がそれ自体で評価されることによって生まれるものであることになる。ここで、「それ自体のため」とは、「他のもののためではない」という意味である。ただし、Stecker とは違い、美的経験の美的価値と内在的価値（それ自体で価値をもつもの）を同一視する Malcolm Budd のような哲学者もいる⁽⁵⁾。

第二章 芸術作品の認識的価値と美的価値との区別

前章での美的価値の定義によると、我々が作品が提供した美的経験の中で、特に写実的な作品が提供した現実世界を反映する美的経験の中で、ある種の新たな物事に関する洞察を得た場合には、この洞察と美的価値の境界が曖昧になってしまうという恐れがある。

したがって、このような恐れを払拭するため、認識的価値の定義を検討する必要がある。

Berys Gaut はその著書『芸術・感情・倫理』の「美的認識主義の定式化」という章で、「知識を伝達する」ことの定義を細かく三つのバリエーションに分けている⁽⁶⁾。そして彼によると、この三つのバリエーションの中で本当に

重要なのは、最小説と最小説のより強いバージョンである。

認識的価値の最小説によると、芸術作品が知識を伝達する、あるいは知識の運び手として存在するとは、その作品が作者のある種の「理解」(understanding)を表現 (manifest) していることである。ここでいう「理解」とは、道徳を含む幅広い種類の知識をカバーしているものである。

最小説のより強いバージョンは、芸術作品が知識を伝達することを、芸術作品が人々に知識を教えることができることとして定義する。普通に考えれば、ある人が他人に何かを教えるためには、必ず教えられる側の人は自分が教えられる内容を「認識」し、そして理解していなければならない。さらに、作品が人に何かを「教える」ためには、人と作品の間の「交流」という側面がこの説に対して必要になる。そして、何かを教えるためには、教える内容が教えられる人が元々知らなかった内容でなければならない。ゆえに、この定義は、教えられる人の知識が必ず増えることを要求する。

この最小説のより強いバージョンがもつとも広く受け入れられている説である。この説によると、芸術作品の認識的価値には、三つの側面がある。一つ目は、芸術作品がある種の認識を表現しているということ。二つ目は、芸術作品が作品を鑑賞する人々と交流することを作者が意図しているということ。三つ目は、人々が作品を経験した後に、何らかの新しい見解、或いは認識を得るということである。

ここで、芸術作品における認識的価値と美的価値との間の違いが見えてくるだろう。まず、認識的価値には、作品を経験する人々に何かを教えることができるという側面が含まれている。美的価値には、そのような人々との関係がない。作品を経験する人々の認識が増えることは、作品が提供した美的経験がそれ自体のために評価される結果——すなわち、美的価値——から独立している。なお、認識的価値の判断は主に作品を経験する人たちによってなされるもの

であって、時代、文化、理解力、判断力などの差異によって、作品における認識的価値の具体的内容は変わる。作品から得た知識も人それぞれである。例えば、円形神殿のようなギリシャ時代の建築、最後の晩餐のようなルネサンス時代の絵画などの芸術作品に対して現代人がくだす美的評価は、作品が作られた時代の人たちによる美的評価とはあまり変わらないだろう。一方、当時の人々が当たり前のこととして認めていた社会制度と慣習、例えば奴隷制度と纏足という慣習などを肯定すべきこととして表現した芸術作品は、現代人の目から見れば、道徳的に悪いものを道徳的に良いものとして表現しているために、道徳相対論者と虚無主義者にとって、自分の理論を証明するものになるかもしれないが、そうではない人にとって、認識的に間違っている作品になるだろう⁽⁷⁾。

以上の例から見ると、認識的価値には、人々に何かを教える側面が含まれている。そして、認識的価値は美的価値より変わりやすいものである。実際、ステッカーによると、芸術作品の認識的価値と美的価値は作品の芸術的価値に含まれている。彼によると、「芸術的価値 (Artistic Value) という語を、ある品を芸術作品として評価するさいに念頭に置かれるべき価値性質、という意味で用いる⁽⁸⁾。」芸術作品の非本質主義 (nonessentialism) ⁽⁹⁾ によれば、作品における芸術的価値は作品の美的価値とは同一視すべきではなく、道具的価値まで含まれていて、幅広い種類の価値を包括している。

作品に対する美的価値はその作品に対する認識的価値に依存しないこともあれば、認識的価値の差異と変化によって変わることもあると証明したい。次の章では、芸術作品における認識的価値と美的価値の相互関係を考察しよう。

第三章 芸術作品における認識的価値と美的価値との関連

芸術作品における認識的価値と美的価値を区別したいま、我々は続いて認識的価値がどのような仕方で美的価値の評価に影響するかという問題に進むことができる。

まず、芸術作品が伝達するすべての知識が美的価値と関連しているわけではない。以下の場合を想像しよう。ある哲学者が自分の書いた小説の最後に、全く内容的に関係のない自分の新しい見解を箇条書きのように物語のあとにつけ加えた。このような小説を読んだとき、我々は新しい知識を得ることができるが、小説の最後の部分の認識的価値は作品の全体的な美的価値にまったく貢献しないだろう。ほかに、古の芸術作品による考古学的な発見は認識的価値があるが、その認識的価値は作品の美的価値に何の影響も及ぼせないと思われる。そこで、芸術作品の認識的価値は美的価値と関連しているという見解を支持するために、私は芸術作品が伝達するすべての知識が美的価値と関連するということとは要求しない。

芸術作品の認識的価値と美との関連性を直観を参照して実例を挙げることに、評価言語の使用とNoel Carrollが道徳と美との関連性を論証するために提出した論法の本稿のト論点に対する適応、という三つの点から検討する。

一、我々の現実の芸術作品を評価する活動から、作品の認識的価値が美的評価に影響することの例を数多く挙げる
ことができる。

一部の推理小説、特に日本の新本格推理小説運動の中で書かれた作品に対してしばしばなされる批判に、登場人物が生き生きとしておらず、物語を進行させるためのたんなる装置として描写されてしまっているという批判がある。このような作品の登場人物は、表現されている行為パターンと心理的活動が相当に単純化、理想化されているため、

現実世界の人間がもつ複雑性が表現されていないことになる。したがって、このような作品は通常、美的に低く評価される。それに対して、偉大なる芸術作品が描写した人物はよく読者に、これがまさに自分が気づかなかった心の内奥の声ではないかとか、この人はまさに『ノートルダム・ド・パリ』のクロード・フロロとそっくりではないかというような印象を与える。それらはすべて、作品が人間に対する深遠な見解を表しているからである。

絵画の場合も同様で、写実的な内容を目的としている漫画と伝統的な写実絵画とでは一般に前者のほうが美的に低く評価されるが、これの原因の一つは人物の表情の表現力の違いにある。人間の表情を適切に表現するためには、顔の無数の部分の精密な調和が必要とされる。同じ感情を表現する表情を描くとき、漫画は伝統的な絵画より描き込みの量が少ないため、伝統的な絵画よりも真実から遠い。同じ伝統的な絵画でも、特殊な状況に置かれている人物がしているべき表情を描くことができないような場合には、その美的評価は下がることになる。

以上の例からわかるように、作品の美的価値は作品が表現した認識とつながっている場合が多くある。前章で与えた「知識を伝達できる」ことの定義によれば、芸術作品が知識を伝達できるとは、芸術作品が人々に知識を教えることができることである。そして、芸術作品が表現した認識は芸術作品が人々に知識を教えることの基礎になっているため、前者の美的関連が可能であれば、後者も美的な関連があることになる。芸術作品が知識を表現することが以上に述べたように美的価値との関連をもつなら、このような「新しい」知識を表現し、かつ読者たちに教えることも美的関連があることになるだろう。

二、我々が芸術作品を評価するときに使っている言葉は認識的な性質が含まれている言葉である。

例えば、芸術作品を高く評価するときは、深遠や (profundity)、心理的な洞察力がある (psychologically penetrating)、洞察に満ちた観点 (insightful perspective)、というような言葉がよく使われている。他方、作品を批

判するときには、浅薄な (shallow) 、歪められている (distorted) 、使い古された決まり文句にあふれている (full of worn cliché) 、といった言葉を使う^⑩。このような評価用語は文学作品に使われる場合が多いが、映画、演劇などの場合にも適用できる。我々は一つの作品を、ストーリーの展開や登場人物の行動が合理的かどうかといった様々な認識的側面から評価する。

このような評価言語の使用は間接的に表現される場合もある。例えば、我々はよく感情的であるという理由で、ある作品を批判する。それは、感情的な作品がしばしば主観的であるために、真ではない理想化された対象が含まれているからである。ときどき流行するような恋愛小説を例にしよう。下手な恋愛小説に対してなされるもう一つの批判は、作品に繰り返し無意味な感情表現があふれているというものである。作品を読んだ人々は何の実質的な知識も得ることができず、ただ感情が喚起されるだけである。感情の喚起さえされず、つまらなく思える人も大勢いるだろう。感情的な作品がすべて質の低い作品であるというわけではなく、以上に述べたような感情的「すぎる」作品のみが美的に批判される。その原因は、間違っている認識の表現と本来に有意義な知識の欠乏である。すなわち、認識的価値の低下は作品の美的評価に影響している。「感情的」という言葉がしばしば作品に対する美的批判になるのもこのためである。

ゆえに、我々が芸術作品の全体的な美的価値を評価する際に認識的な性質を含む言葉を使っているという事実は、作品の認識的価値が美的評価に影響することの証左となっている。

三、Noel Carroll が芸術作品における道德的要素と作品に対する美的評価との関連性を擁護するとき提出した策略は、作品の認識的価値と作品に対する美的評価の関連性に関する議論にも用いることができると思われる。

Carroll による^⑪、叙事的な作品の道德的欠点 (moral defect) は人々が作品を完全に受け入れる (fully engaging)

ことを阻害しているため、作品の美的欠点 (aesthetic defect) (11) になる。

同様に、作品の認識的な欠点は人々が作品を完全に受け入れることを阻害している。ある小説或いは映画作品が「この物語は実話に基づいている」と宣言していたならば、人々がこの作品に対して抱く関心と作品を鑑賞しているときの共感はいくら強烈になるだろう。逆に、もしあるドキュメンタリーの中の人物の行動と会話がドキュメンタリーの監督によるやらせだということが人々に知られたなら、作品が元々観衆に伝えたかったテーマ、観衆に感じさせたかった感情は、登場人物が現実のとおりではないという作品の認識的な欠点のせいで、拒絶されるだろう。つまり、人々に伝えたい美的経験が予想通り経験されないということは、作品にとって大きな美的欠点になる。

本章の最初のところで述べたように、芸術作品が伝達するすべての知識が美的価値と関連しているわけではない。したがって、芸術作品の認識価値が美と関連性をもつことを支持するという本稿の目的からすれば、どのような場合に知識が美との関連性をもつのかという問題に本稿で答える必要は必ずしもない。それでも、少しばかり試みることはできる。

Gautによると、「認識的な真価に美的関連性をもたせるのは、作品がその認識的な真価を伝える方法、すなわちそれによってその作品がその洞察を伝えるようなモードである⁽¹²⁾。」彼はさらに小説の例を用いて次のように説明している。「オースティンの人間本性への洞察が彼女の小説を芸術的・美的に高めているのは、エマの性格とそれに内的に関係しているものをオースティンが構成したもの、すなわちエマが実際にやったこととエマが他人に対して振る舞った仕方において、それらの洞察が現れているときである⁽¹³⁾。」つまり、芸術作品の認識的価値と美的価値が関連性をもつのは、その認識的価値が作品の形式的な手段とつながっており、なおかつ具体的な描写によって（ときどき間接的に）表現されている場合が多い。そして、この美的関連性が低い場合には、芸術作品が与える生き方について

の抽象的な一般論的知識はたいいてい陳腐なものになる。

第四章 芸術作品の認識的価値が美的価値と関連性をもつことを否定する議論

前章では芸術作品の認識的価値が美と関連することを支持する議論を検討した。そのうえで、問題をより包括的に理解するため、これから前章の結論を否定する議論を検討する。

一、偉大なる作品が伝達する観点はしばしば大きく異なっており、互いに矛盾している場合すらある。それによって伝達されている観点が同時に真であることが不可能な二つの作品が両方とも美的に高く評価されることは珍しくない。William Gassによると、「オノレ・ド・バルザックが見る世界はミシェル・ビュートルが見る世界とは大きく違っている。ゲーテとミルトンは同時に正しいことが不可能である。ゆえに、もし正しくあること (being right) が重要であるならば、我々は混乱に陥り、古典的な作品のほとんどはごみの山に向かっていたことになるだろう⁽¹⁴⁾。」道徳的な性質に関しては、Gassは以下のように述べている。「ダンテの観点とソフォクレスの観点のように、或いはシェイクスピアとミルトンのように、芸術作品の間の道徳観点の差異は極めて大きい。もしこれらの作家たちの真価がいやしくも何かに関する彼らの正しさ (being right) に依存しているというのなら、そのとき我々は何を言うべきかを単純に考えてみよ⁽¹⁵⁾。」

道徳観点に関して言えば、人間社会における文化と慣習の違いに基づく道徳規準は多少違っているが、一方で共通している点も多い。ギリシャ時代的美徳は同時代の中国において、そして現在の社会においても大部分は道徳的に良いものとして扱われている。芸術作品の場合も同様で、偉大なる作品の間にはたしかに大きな違いがあるが、それ

でもそれらの共通点を無視してはならない。

しかし、差異は確かに存在する。たとえば、キリスト教の信者たちの著作と共產主義者たちの小説との間には神が存在するかどうかについての差異があるし、また聖母マリアは処女の状態で妊娠したというような歴史的な事件の有無についても両立できない様々な観点が芸術作品の中に存在する。

Gassの論点に対し、Gautは主二つの解決策を提案した。

まず、芸術作品の価値を評価する際に、多元主義的な立場をとる。芸術作品の全体的な美的価値はいろいろな要素に対する評価の総合であって、たとえ認識的な部分の得点はマイナスになっても、美的評価の本体である美、表現力、形式などの部分が高く評価されるなら、全体的に偉大なる作品という評価が得られることになる。

Gautによる二つ目の解決策には問題がある。なぜなら、芸術作品における認識的価値を美的価値の一部分としてみなすことは妥当ではないと思われるからである。認識的価値が美的価値の多元要素の中のひとつとして扱われているなら、芸術作品における認識的価値は作品の美的価値に必ず影響する。全体を構成する要素が全体に影響することは論理的に必然である。芸術作品における認識的価値が作品の美的評価と関連するという観点を擁護しようとしているGautは、自分が擁護しようとしている結論が含まれている観点、すなわち認識的価値は美的価値の多元要素のうちの一つであるという観点を、擁護の前提として使ってしまった⁽¹⁶⁾。

Gautによる二つ目の解決策は、作品の認識的な価値は命題の真理性に存在するだけではないと考えるものである。彼によると、「ある作品は興味深い新しい概念を導入し、重要な想像的技術を開示する一方で、その主張において間違っているということがありうる。なぜなら、真なる命題を提示することは認識の一側面にすぎないからである⁽¹⁷⁾。」哲学の著作にもこのような場合は多くある。たとえば、デカルトとホブズがそれぞれ主張している知識の源に関する

論点は両立できない。しかし、彼らが世界を見たり説明したりする新たな方法を我々に提示したということだけで、我々はそれらに十分な認識的価値を認めるだろう。そして、今本稿が検討している芸術作品の認識的価値が美と関連することを支持する議論と否定する議論も、そのうちのどちらかが間違っている。しかし、我々は以上のすべての観点を認識的な価値がある観点として認めるだろう。芸術作品の場合も同様に、我々はサド侯爵の作品に見いだせる虐待、不倫などの道徳的に悪い観点を批判するにもかかわらず、彼の作品の中で構築された精神的な世界、そして『ソドム百二十日』などの小説で提示された彼の優れた想像能力を、われわれは依然として認識的価値が高いものとして認めるだろう。

そして、作品はそのある観点が偽だと判明した後でも、作品のほかの部分で真である経験的な知識・実践的な知識を提供することができる。したがって、部分的にはマイナスでも全体的な認識的価値がプラスになることはありうる。同じくサド侯爵の作品を例にして説明すると、彼が自分の小説『美徳の不幸』で伝えようとした「美徳を守ろうとする者に不幸が降り掛かる」という観点は必ず正しいわけではないが、読者たちは主人公ジュステイーヌが嘗めた様々な辛酸など数多くの経験的知識を手に入れることができる。そして、後者のような現象的、経験的な知識こそが作品を構成する主たる部分であるため、たとえば作品が伝えている観点が間違っているとしても、我々は作品の全体的な認識的価値を高く評価するだろう。

二、前章の第二部分で論じた、芸術作品を評価するとき人々が使っている認識的な価値をもつ言語については、メタ倫理の領域で有名な錯誤理論 (error theory) のような反論が可能である。この反論によれば、芸術作品を評価するとき、人々が使っている言語には確かに認識的価値があるが、このような言語の使用は間違っている。なぜなら、芸術作品自体は様々な原因によって、知識を伝達できないからだ。確かに知識を伝達できない芸術作品が存在してい

るが、知識を伝達することが可能で認識的価値が含まれている作品も大勢ある。論理的に判断すれば、認識的価値をもっている作品の存在を一例で証明できるなら、ここでの反論が成り立たない。このような例が多く挙げられる。実際、本稿に挙げた作品はすべての認識的価値が含まれている。

我々は深遠さ(profundity)というような言葉芸術評価で用いるとき、その言葉の真理性を意識して芸術作品を評価することはしない⁽¹⁸⁾。例えば、歌詞のない純粋な音楽作品はしばしば深遠さという言葉で評価されるが、純粋な音楽は真理を含むことはできない。この観点に対しては、この節の第一部分で述べたように、真理性は認識的価値の一部分にすぎないと言えよう。なお、文学作品という命題的な知識が含まれている芸術作品を深遠さで形容するときには、確かにこの言葉が真理性とつながっていることも可能である。Gautによると、深遠さという言葉は、例外はあるものの、真理性とは切り離しにくい。「我々が深遠な言明について話しているとき、真理に対するある種の必然的な関係がある。もし、このようなつながりがなければ、『すべての深遠な言明は偽である』と言うことも理屈の上では問題ないことになるだろう⁽¹⁹⁾。」

第五章 美的自律主義の否定

本稿の前四章の議論により芸術作品における認識的価値は美的価値と関連するということが論証された今、認識的価値、道徳的価値などの「外来者」は美的評価に何の影響も与えることができないと主張する美的自律主義は自然に否定されるだろう。

ここで、美的自律主義をより深く理解するために、Peter Lamarque と Stein Haugom Olsen の著作『真理・虚構・文学』

(*Truth, Fiction and Literature*) の中で提示されている見解を例にする。

彼らは主に文学と文学評論に着目し、文学的価値にとって重要なのは作品があるテーマをどのように発展させているかであって、作品の内容の真理性ではない、と主張している。また、文学評論の領域には物語を述べるテクニクと比喩表現の研究はあるが、文学作品の内容の真理性を検証する流れはない。彼らによると、哲学の著作にとって一番重要なのは結論の真理性であるが、文学は以上の理由から哲学とは別のものになる⁽²⁰⁾。

しかしながら、Lamarque と Olsen の見解が我々の結論に瑕疵を与えることはない。芸術作品が我々に教える知識は、種類によって分別すると、命題的な知識だけではなく、実践的な知識と現象的な知識もある。たとえば、彼らの主張が正しいとしても、芸術作品の認識的価値の中の命題的知識以外の部分が作品の美的評価と関連することは依然として可能である。

また、Lamarque と Olsen の論証は欠陥がある。文学評論の領域の中に作品の内容の真理性を検証するという研究分野がないことと、作品の内容の真理性が作品の美的価値に影響しないことは、まったく別の事柄である。実際、第三章で述べたように、芸術作品の真理性は作品の美的評価に影響する場合が多くある。

結論

以上の議論から、我々は芸術作品における認識的価値は作品の美的価値に影響すると結論づけられる。そして、作品の認識的価値と美的価値とは関連性がある場合には、作品の認識的価値が高いほど、作品の美的価値が高くなる。この結論は芸術評論の実践に用いることができるだけではない。本稿の結論は、芸術作品の美的価値が認識的価値

や道徳的価値とは無関係だと主張する美的自律主義が誤りであることを導く。なお、作品の中で我々に伝えられている道徳的知識が美的価値と関連性をもつのは、この知識が認識的価値の一部であるからである。

芸術作品における道徳的価値と美的価値との関係については、Mathew Kieran のような、作品の道徳的に悪い内容が道徳的に良い内容と同じく作品の美的価値に貢献すると主張する文脈主義者 (contextualism) がいる一方で、Gaut のような、作品の道徳的に良い内容だけが作品の美的価値に貢献し、道徳的に悪い内容は作品の美的価値を損なうと主張する倫理主義者 (ethicism) もいる。芸術作品における道徳と美の関係およびそれに関する彼らの議論については、稿を改めて論じたい。

参考文献

- ロバート・ステッカー 著、森功次 訳、『分析美学入門』、勁草書房、二〇一三年。
- Budd, Malcolm [1995], *Values of Art: Pictures, Poetry, and Music*, Penguin Books.
- Carroll, Noël [1996], 'Moderate Moralism', *British Journal of Aesthetics*, Vol. 36, No. 3.
- Gass, William [1987], 'Goodness knows nothing of Beauty: On the Distance between Morality and Art', *Harper's Magazine*, vol.274.
- Gaut, Berys [2007], *Art, Emotion and Ethics*, Oxford University Press.
- Gaut, Berys [2003], 'Art and Knowledge', *Oxford Handbook of Aesthetics*, Oxford University Press.
- Lamarque, Peter [2006], 'Cognitive Value in Arts: Making the Boundaries', *Contemporary Debates in Aesthetics and the Philosophy of Art*, Blackwell.
- Miller, Richard [1979], 'Truth in Beauty', *American Philosophical Quarterly*, vol. 16.
- Peter Lamarque and Stein Haugom Olsen [1994], *Truth, Fiction and Literature: A Philosophical Perspective*, Clarendon Press.

註

- (1) ロバート・ステッカー 著、森功次 訳、『分析美学入門』、勁草書房、二〇一三年、八十三頁。
- (2) Ibid. P. 85.
- (3) Ibid. P. 361.
- (4) Ibid. P. 354.
- (5) Budd, Malcolm [1995], *Values of Art: Pictures, Poetry, and Music*, Penguin Books, P. 4.
- (6) Gaut, Berys [2007], *Art, Emotion and Ethics*, Oxford University Press, PP. 136-140.
- (7) 道徳的価値は主に人の行為と品質に対して価値評価した結果だが、道徳的価値に対する認識も認識的価値の範囲に含まれていて、認識的な価値評価を受けることができる。
- (8) ロバート・ステッカー 著、森功次 訳、『分析美学入門』、勁草書房、二〇一三年、三百五十四頁。
- (9) Ibid. P. 355.
- (10) Miller, Richard [1979], 'Truth in Beauty', *American Philosophical Quarterly*, vol.16, PP. 317-325.
- (11) Carroll, Noel [1996], 'Moderate Moralism', *British Journal of Aesthetics*, Vol. 36, No. 3.
- (12) Gaut, Berys [2003], *Art and Knowledge*, *Oxford Handbook of Aesthetics*, Oxford University Press, P. 445.
- (13) Ibid. P. 445.
- (14) Gass, William [1987], 'Goodness knows nothing of Beauty: On the Distance between Morality and Art', *Harper's Magazine*, vol.274, P. 43.
- (15) Ibid. P. 42.
- (16) なお、芸術作品における美的価値と認識的価値は別のものだという結論は第二章で既に明らかにした。当然、認識的価値と美的価値はお互い重複している部分がある。Robert Stecker の美的価値の定義によると、美的価値は美的経験によるものである。芸術作品が提供した知識を獲得する経験は作品の美的経験に含まれるが、知識の構成要素は経験だけではない。経験以外の部分は認識的価値の中に存在し、美的価値の中には存在しないものである。ゆえに、我々は芸術作品における認識的価値を美的価値の一部分として扱うべきではない。
- (17) Gaut, Berys [2007], *Art, Emotion and Ethics*, Oxford University Press, P. 175.
- (18) Peter Lamarque and Stein Haugom Olsen [1994], *Truth, Fiction and Literature: A Philosophical Perspective*, Clarendon Press, P. 130.

- (61) Gaut, Berys [2007]. *Art, Emotion and Ethics*. Oxford University Press, P. 169.
- (62) Peter Lamarque and Stein Haugom Olsen [1994]. *Truth, Fiction and Literature: A Philosophical Perspective*. Clarendon Press, chs 10-13, 1994.